空の里だより

NPO法人地域福祉支援センター ちいさな手　第6号

- 介護よもやま放談
  ～ちいさな手座談会～
- ちいさな手と私
- ちいさな手　スタッフ紹介
- コラム「風の言の葉」
- ちいさな手のお仲間
- 時の旅　今昔

【第6号】
2016年10月1日 発行

介護よもやま放談
～ちいさな手座談会～

テーマ　在宅のあり方

座談会メンバー紹介

白…白取絹恵さん
屈足出身。東京で認知症専門の看護師として働いている。認知症の母親と、昨年3月に脳梗塞で倒れた父親が、現在新得町で二人暮らし。絹恵さんは、その一人娘。

清…清野祥子
言わずと知れた、ちいさな手の理事長。

清　お父さんが脳梗塞で倒れたのは、確か昨年の3月でしたね。うちのヘルパーが1日2回、お世話でおじゃましていたのですが、その日はいつも開いてるカーテンが閉まっていて、変だなと思って中に入るとお父さんが倒れていたんです。絹恵さんにもすぐに連絡しましたが、さぞびっくりしたでしょう？

白　はい。命に別状はないと聞きほっとしましたが、私は東京にいて、父が認知症の母を自宅で介護していたものですから、今後のことがとても心配でした。

清　結果的に右側の麻痺が残り、お父さんとしては家に帰りたいという気持ちが強かったですが、娘としての思い、看護師としての思い、この先どうしていくのか絹恵さんも迷いましたよね。

白　いろんな葛藤がありました。私としては父を家に帰してあげたかったのですが、同僚からは反対されました。東京に両親を連れて行けばという話もあり、施設もたくさん見てまわりましたが、知り合いのいない都会のど真ん中で暮らすなんて、やっぱりかわいそうだし…。

清　それで在宅を選んだんですね。

白　そうなんです。でも急性期の病院では、自宅に戻れるかどうか予測がつきませんでした。リハビリセンターに転院してからも、最初先生は在宅に対して否定的で…。だけど最後の1ヶ月で大逆転したんです。

清野祥子

白取絹恵さん

清　お父さんも家に帰りたい一心でリハビリを頑張りましたよね。みるみる病状も良くなって。お母さんもヘルパーとの生活を頑張って、絹恵さんも東京と十勝を何度も往復して、本当に三人ともすごく頑張ったと思います。

白　おかげで次の段階に進むことができました。ただ、絶対に大丈夫だという太鼓判ではなく、いったん老健施設に移ってどれだけ自宅での生活が可能か評価してもらうという形で。

清　その老健施設で3ヶ月弱生活リハビリを行い、ようやく自宅に戻れる判断が出たんですね。

白　自宅に戻ると別の問題が出てきました。屈足の家は、築年数が古くトイレも狭かった。買い物などの便も悪かったですし。それでいろいろ考えて、たまたま空いていた新得の公営住宅に引っ越すことにしたんです。

清　お母さんは当時渋ってましたね。

白　私には言いませんが、ヘルパーさんには「なんで勝手に引っ越すんだ？」ってこぼしていたそうですね（笑）。でも

そのたびにヘルパーさんも真摯に説明をしてくれて、本当に助かりました。

清　お母さんもお父さんも、私たちが一生懸命やっていることをちゃんと理解してくれたから、ありがたかったです。新得でのご両親の二人暮らしが始まって、もうすぐ一年が経ちますね。

白　父は、違う場所での生活、また自分が倒れたらという不安と戦っていたようですが、最近では生活に自信がついてきたみたいです。

清　絹恵さんが月に2回、東京から帰ってきてくれるのを楽しみにして毎日頑張っています。父母娘の3人がそれぞれ頑張っているからこそ、在宅が成功したんですね。

白　ちいさな手の存在もとても大きいです。実際に、東京行きの話が出た時、私はちいさな手から離れるのが嫌だったんです。ここまで深く関わってくれる事業所は、東京では見つけられなかった。両親に何かあった時に身内がすぐに駆けつけられないと在宅はダメと言われた時も、清野さんたちが代行してくれると言ってくれました。両親への接し方も、歳をとったから当たり前という考えではなく、ちゃんと相手の気持ちを理解した上で対応してくれます。都会にも地方にも大小さまざまな事業所がありますが、大事なのはその事業所が持つ理念だと感じました。

清　そう言ってもらえると、すごく嬉しいです。絹恵さんの考え方、ご両親の考え方が私たち理念と合致したのだと思います。私たちも、白取家には本当に勉強させてもらいました。在宅は、私たち事業所だけ頑張ってもだめ。やっぱり家族の関わりが大事だということ。ご家族と私たちが一つのチームとなることで、うまくいくんです。

だから、在宅にするのかそうでないのか、それはそれぞれの家族が自分たちで納得して結論を出すのが一番大事だと思います。私たちはその結論を支えるというスタンス。

絹恵さんを中心に白取家が出した結論に私たちは全力で支援していきたいと思って、そうしてきました。

白　ありがとうございます。この一年半、たくさんのことを考え、学び、最後はやっぱり医療ではなく介護なんだなってことを実感しました。私も皆さんに頼ってばかりではなく、できるだけ新得に足を運んで、両親と一緒に過ごす時間を大切にしていきます。

清　新得には、在宅を希望されるご家族もまだまだたくさんいらっしゃいます。今回の事例を参考に、いろんな道をアドバイスできるよう私たちも努力していきます。

ちいさな手と私

利用者 湊（みなと） 輝美子（きみこ）さん（75歳）

美容学校を卒業した私は札幌の資生堂で働いていたが、叔父に勧められ、江差町にある檜山支庁に転職をした。主人と出会ったのはその頃。26歳で結婚をし、子ども二人を授かった。主人の仕事柄全国を転々とし、幼少の頃から好きだった「絵」の技術を、神戸で出会った先生に伸ばしてもらったことは私の財産になった。11年ほど前、主人の退職を機に新得へ。以来、主人とここで好きなことをやっている。スコップ一つで耕した畑を半分ずづ分け、主人は野菜を、私は花を育てた。主人は木工にも力を注いでいて、家にある家具類の多くを作ってもらった。ただし、色味や飾り付けは私がアドバイスをする。お陰様で住み心地の良い家になった。

ちいさな手には3年ほど前からお世話になっている。ヘルパーさんに来てもらっているが、清野さんご夫婦の教育がいいのか、スタッフの皆さんは本当にしっかりしていて優しい。私も70代半ば。皆さんにこうやって力添えをもらえることに感謝しつつ、あまり人には迷惑をかけないようにこれからもゆっくりと暮らしていこうと思う。

湊さんご夫婦と。

木のフレームは、ご主人の弘（ひろむ）さんの手づくり。絵との相性もぴったり。

この木枠も弘さんのお手製。塗装にまでこだわりが見える。

輝美子さんが描いた椿の絵。賞をもらった経歴もあり、素晴らしい作品である。

輝美子さんの手づくり草履。

色とりどりの花に癒されるお庭。

ちいさな手

スタッフ紹介

児童デイ・高齢者デイ・ヘルパー

川村（かわむら） 由美子（ゆみこ） さん

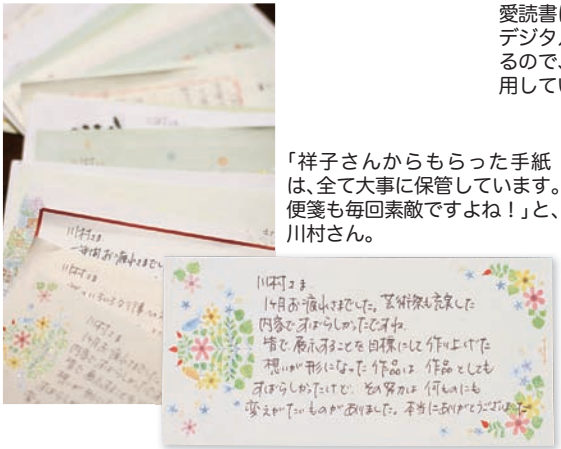
上士幌町ぬかびら出身

川村さんがちいさな手で働くきっかけとなったのは、祥子理事長からのスカウトだった。以前から知り合いだった二人。祥子理事長曰く、二人息子を女手一つで育て上げたたくましさと、人あたりの良さに惚れ込んだのだという。仕事を探していた時に「うちで働かないか？」と声がかかった。でも、川村さんは自分にできる自信がなく、すぐにOKをしなかった。すると今度は、「これ読んでみて！」と光彦さんが書いていた連載を渡された。「そこに記された光彦さんと祥子さんの志に深く感動しました」。川村さんは、ちいさな手で働く意思を固めた。

ちいさな手に勤めて今年で5年目。川村さんはここで働くことに幸せを感じている。「毎月の給料袋に祥子さんからの手紙が入ってるんです。感謝や励ましの言葉がそこに綴られていて、これが本当に嬉しくて、毎日頑張っていられます！働きながら、ヘルパーの資格まで取らせてもらったし、たくさん恩返ししなきゃいけませんね」。

人の役に立つことは、生きる上で大きな喜びとなる。「由美ちゃん助かった！」という言葉が川村さんの力に変わる。

愛読書は聖書。今はデジタル版も出ているので、そちらも愛用している。



「祥子さんからもらった手紙は、全て大事に保管しています。便箋も毎回素敵ですよね！」と、川村さん。

大の仲良し！
愛犬ハルちゃん（12歳）と。

風の言の葉

歳をとって一人暮らしが無理になったからと家族から施設を勧められるというケースを多く見かける。本人は、「まだ自宅で頑張りたい」と思っていてもである。

介護現場で多くの家庭を見てきた私は、この「ままならない現実」について、実は、自らが築いてきた家庭の「生活文化」に影響を受けているのではないかと感じている。

今回は、この「生活文化」について考えてみたい。

最近「住み慣れた地域で暮らし続けよう」という言葉をよく耳にする。施設や病院で暮らし最期を迎えることよりも、できるだけ住み慣れた場所で頑張り、自分らしく生き抜くことを推奨する言葉だ。団塊の世代が後期高齢期を迎える2025年を目標に、国や地方自治体の施策もこの問題に対応するようにシフトしてきているが、果たして住み慣れた地域で生活し続ける文化が築かれてきたか甚だ疑問だ。

歴史を遡れば、戦前は確かに「家」や「地域」で助け合いながら「介護」や「看取り」に取り組む文化があったし、それはごく自然なことでもあった。

しかし、戦後の教育と高度経済成長は基本となる家族を解体し、地域という社会構造も大きく変化させてしまった。この変化してしまった「家族」や「地域」は、今や「生活文化」のあり様まで変えてしまっている。

一端日常化してしまった「生活文化」は、一朝一夕には変えられないだろう。だとすれば、最近俄かにはやりだした「住み慣れた地域で暮らし続けよう」という耳触りの良いキャッチフレーズに果たして現実味があるのか極めて疑わしい。

私は、「生活文化」の根幹は「価値観」だと思っている。人の心に「価値」をどのように育むかは、やはり「教育」の問題ではないだろうか。つまり、「教育」が「価値」を育み、人々の「生活文化」を形成する。そうゆう積み重ねの上に「介護」があるのだとしたら、答えはそう単純ではない。

北海道人は、統計的に施設や病院に預けることに抵抗感がないと言われている。ということは、施設や病院を選択する文化が定着しているともいえる。

「老後は自宅で」とか「自宅で死にたい」と密かに考えている方は、家族のあり方を含め、それなりの時間をかけて理想とする「生活文化」の醸成を試みてはいかがか。

…これを読んでいる段階ではもう遅いかもしれないが…。

（光）

時の旅 いまむかし

今昔

過去があるから今があり、
今があるから未来がある。
愛燦燦とふりそそぐ
とっておきの一枚をお届けします。

某国会議員後援会婦人会で、登別伊達時代村に行った時の写真。70代当時は少々ふっくらと…(笑)。じっとしていられない性格で、大の旅行好き。洋裁や編み物が得意で、若い頃はよく小物を作ったり、スカートの直しをやったりしていました。

24年後

利用者
野口 文子 さん

今も背筋がシャンとまっすぐしっかりしてます！
花が好きで、毎日お花を摘みに外へでます。

ちいさな手のお仲間

清水 直子さん

清水さんは、少し前まで自宅の一室を絵本カフェにして、自然派の手づくりスイーツやお茶を提供していました。「できる限り自分の口に入るものは、自分で作りたい」という清水さん。ちいさな手の畑の一部を使って野菜などを栽培しています。また、月に1回絵本の読み聞かせに来てくれていますが、その語り口調はまるで短いお芝居を観ているよう。近い将来、子どもたちに向けて文庫を読んでもらう場所を提供する予定です。

◀「絵本の入口に年齢の上限はない」と話す清水さん。大人だから気づけることがあります。今後はもっともっと本の数を増やしていく予定♪

▶手作りのスイーツやお茶に心がなごみます。
自給自足の清水さんは、自ら育てた大豆で味噌作りも行います。

特定非営利活動(NPO)法人
地域福祉支援センター
「ちいさな手」

〒081-0038 北海道上川郡新得町西3線50番地15
ＴＥＬ0156-69-5560　ＦＡＸ0156-69-5561
相談専用 0156-69-5570
□E-mail nposcswc@chive.ocn.ne.jp　□HP http://npochiisanate.jimdo.com/